

《研究メモ》

「渤海」文字資料からみた女真文字の起源に関する一考察

— ヴォヴィン論文 (2012) を中心として —

川崎 保

1 はじめに

渤海に独自の文字（以下、「渤海文字」）が存在したか否かについては、『旧唐書』やいくつかの文献にその存在をうかがわせる記述があるとされる。こうした文献資料や考古資料に基づいて「渤海文字」が存在したという説が唱えられたことがあったが、渤海の遺跡から漢字が記された多くの瓦が発掘されたことにより、渤海ではおもに漢字が用いられていたことがわかり、いわゆる「渤海文字」の存在は否定されてきた。

しかし、近年渤海の出土瓦に記された文字を分析した歴史言語学者のアレキサンダー・ヴォヴィン氏は、漢字の範疇に入らない文字があり、その中には女真文字と共通あるいは類似するものが存在すると指摘した。氏は、このことを根拠に女真文字は、完顔希尹によって12世紀に発明（『金史』など）されたものではなく、女真文字以前に「渤海文字」が存在しており、女真文字は「渤海文字」から発展したものであるという仮説を提示した（ヴォヴィン2012）。

ヴォヴィン論文に提示された女真文字の原型とする「渤海文字」の事例はまだ少なく、またいくつかの疑問点もある。しかし、単に渤海で独自の文字が創作されていたか否かということだけでなく、渤海でも、日本の万葉仮名と同様な漢字の表音文字としての体系的利用、後の女真文字の起源となるような独自の文字の存在、さらに、女真語や満洲語と同系統の言語や古朝鮮語話者が存在して可能性などについても論じており、ヴォヴィン論文には、今後の渤海や女真の言語や文字に関する研究を行う上で、極めて重要な指摘を含むと考え、ここに氏の成果を紹介し、筆者の考えも示したい。

2 ヴォヴィン論文「完顔希尹が女真文字を創作したのか」の概要

ヴォヴィン論文（2012）では、女真文字が一般には1119年に完顔希尹によって創作されたという根拠となっている『金史』の記事（『完顔希尹碑』は1121年、『大金国志』は1122年とする）について、「『文字』はめったに『創作』されない。たいていの場合、それ以前の

文字の中から徐々に出てくる」というフィンランドの言語学者ユーハ・ヤンフネン（1994）の指摘を踏まえ、『金史』の記事自体も、ゼロから女真文字を創作したというよりは、それ以前から存在した文字を編集したことを記述しているとする。

『金史』巻73「(完顔)希尹伝」

金人初無文字，國勢日強，與鄰國交好，乃用契丹字。太祖命希尹撰本國字，備制度。希尹乃依仿漢人楷字，因契丹字制度，合本國語，制女直字。天輔三年（1119）八月，字書成，太祖大悅，命頒行之。賜希尹馬一匹、衣一襲。其後熙宗亦制女直字，與希尹所制字俱行用。希尹所撰謂之女直大字，熙宗所撰謂之小字。

氏は、東アジアの漢字に由来する文字体系は、3つのグループに大別され（①韓国の郷札や日本の万葉仮名などの漢字の表音的用法。②ベトナム語のチュノム（字喃）や古壮字などの漢字の改良を伴う漢字の借用。③契丹文字、西夏文字や女真文字などといった漢字をモデルにしつつも新しい文字の創作。）、発展してきたことも示す。

さらに、『旧唐書』巻199下「渤海靺鞨伝」に、渤海の人々が「有文字及書記」であったことや「李謫仙醉草嚇蠻書」『今古奇観』という説話に、渤海に独自の文字があり、「此書皆是鳥獸之迹」のようであったという記述を根拠に、中国北方の非漢民族の国家が、漢字とは異なる文字を創作する傾向があったことから、渤海文字の可能性を探っている。

しかし、漢字以外の独自の文字を使用していた可能性を指摘していたソビエトの考古学者シャフクノフ（1958）の突厥文字使用説については、根拠となった考古資料がきわめて断片的であって、解釈にも問題ありとして退けている。

氏は、渤海文字の認定をまず課題として取り上げ、もし渤海文字が存在するとすれば、渤海の遺跡から出土するいわゆる瓦押印文字の中で、漢字とされるものを除いたものの中に、存在するはずとし、明らかに漢字でない氏が考えた文字を、朱榮憲の『渤海文化』（1971）の中から3例をあげている（図1）。

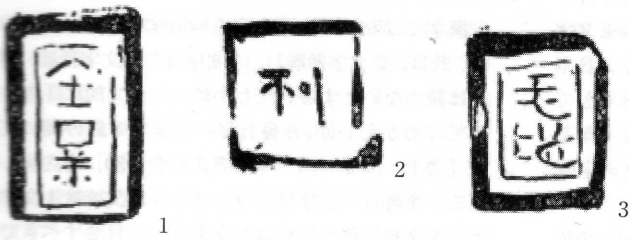


図1 漢字ではないとされた渤海の出土文字資料

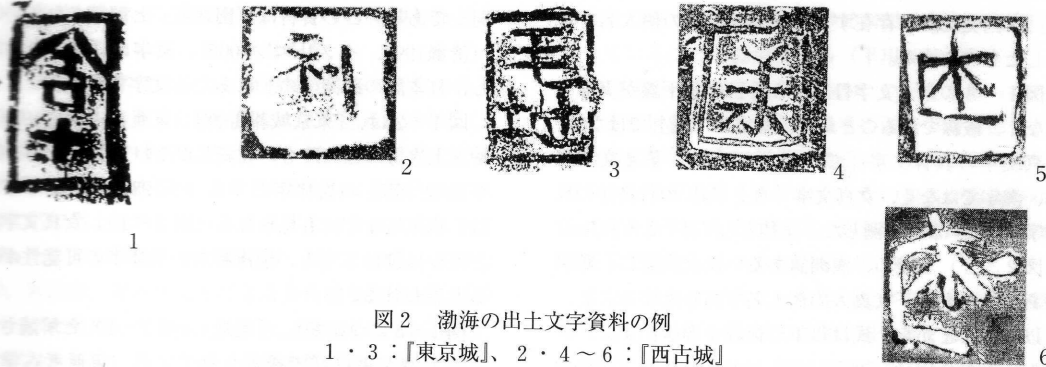


図2 渤海の出土文字資料の例
1・3：『東京城』、2・4～6：『西古城』



図3 シャイギン遺跡
出土銀牌の女真文字



図4 『吾妻鏡』銀簡の女真文字

図1-1は3文字で、第1文字は女真文字「𐰺」(*pe: 古い・老の意)、漢字の「口」に見える第2文字目は女真文字の「𐰽」(*gorhon: 十三の意)で、第3文字目は女真文字の「𐰾」(*ni: 所有格を示す文字、日本語でいえば助詞「の」にあたる)とする。全体としては女真文字に直せばとなり、*pe gorhon-ni「全口𐰾」(老十三の)(図2-1)と読め、工人や工房の名称ではないかと推測する。

図1-2は、女真文字の表音文字「𐰽」(*in)の異体字に対応するとする。ただ*inという言葉自体は、(女真語と極めて関係が近いと考えられる)満洲語の語彙にはなく、古代朝鮮の家族名や個人名 In (印、因など)が『三国史記』に存在するので、朝鮮語の個人名を音写したものとする。

図1-3の第1文字目は、3番目の水平線が実線ではなく、破線であることから、漢字の「毛」ではなく、女真文字の表音文字「𐰽」(*ir)であり、第2文字目も、漢字ではなく、女真文字「𐰾」(*a)の行書体の異体字ではないかと推測した。全体としては「𐰽𐰾」(*ira) (図2-3)と読め、満洲語あるいは女真語に、類例があることから、女真人の個人名であるとする。

以上のことから、氏は以下の仮説を導き出す。

1. 女真文字は、渤海(866-926)の瓦の文字の中だけにその原型が見出される。女真文字の原型は、「渤海文字」(渤海-女真文字)にあるとすれば、その起源は7世紀後半あるいは8世紀前半に遡る可能性が高く、漢字から発展した非漢字文字としては、契丹や西夏文字より古い。
2. 図1-1が*pe gorhon-ni、図1-3は*Iraと読めるとすれば、渤海で女真語が行われていたことを示し、渤海人の一部は、女真系(ツングース系)であったことを示す。
3. 図1-2 *Inが韓国語の人名を音写したものであれば、渤海を構成する人々には女真と朝鮮の要素が混合していたものと考えられる。
4. 満洲語あるいは後期女真語の/f/<*pという既知のデータから渤海の*pe (古い・老)の言葉の存在が得られた。

3 ヴォヴィン論文の文字の解釈について

まず、ヴォヴィン論文が、根拠とする朱榮憲の『渤海文化』所収の渤海の文字資料であるが、出土した遺跡が明確ではなく、やや図版が不鮮明であり、朱氏の解釈には問題があるという指摘もある。よって、氏の引用した資料だけでなく、近年、学術的な考古学調査が行われ、報告されている資料(吉林省文物考古研究

所ほか2007)も参照しながら、その是非を検討してみたい。

漢字ではないとする文字を検討する図1-1について、氏は、3文字と解し、1文字目と2文字目は、「舎」とは読めないとする。たしかにバランス的に「舎」としてはおかしいが、「舎」という漢字の銘の例(東京城「舎十」図2-1)(東亜考古学会1939、李1984)がある。筆者は一文字目(ヴォヴィン論文では1文字目と2文字目)については、女真文字に付合すべきではないと考える。図1-1の2文字目(ヴォヴィン論文では3文字目)の文字は、ロシア沿海州のシャイギン遺跡出土銀牌の二文字目の文字「𐰾」(図3)とほぼ同一である。この資料は「国之誠」と解読されている(清瀬1997、イブリエフ2006)。漢字の「之」に対応し、日本語の助詞「の」にあたる文字である。

図1-2は、『東京城報告書』(東亜考古学会1939)や三上次男(1990)も、判読しがたい文字としている。李強は「切」の異体字とする(李1982)。同様の字体は、東京城などにも見られる(図2-3)。女真文字かどうかは別にしても、渤海特有の異体字の可能性があると思われる。

図1-3についても、「毛地」(図2-4)と解読されている例が東京城で報告されている(東亜考古学会1939)。「毛」は西古城でも報告されており(吉林省文物考古研究所ほか2007)、漢字の範疇の中で理解できようか。

ヴォヴィン論文で挙げられた資料の中で、図1-1の1文字目や図1-3は、「舎」や「毛地」といった漢字として解釈できる可能性もあると思われる。確かに文献などにみられる字体とはかなり差があるが、工人の漢字表記の癖や漢字に対する習熟度さらには、瓦に刻まれた文字ということもあって紙の上に書かれたり印刷されたりする文字とは、渤海の例に限らず、もともとかなり様相が異なる。いわゆる墨書土器のような製品に紙に文字を書くのと比較的近い状態で書かれるものと異なり、瓦や土器に押印された文字や銅鏡などの金属器に記された文字は、字書に見られるような文字とはかなり異なる字体(減画など)で書かれることが知られている(森1994、須田・河野編2000)。

4 従来の渤海や女真の文字研究との対比

渤海に独自の文字が存在したかについては、ヴォヴィンが挙げた『旧唐書』や「李謫仙醉草嚇蠻書」以外にも、金在善(1997)が「李太白全書」所収の『玉塵叢談』の「渤海國有書、於唐舉朝無解之者、李太白能解而答之」との記述などを根拠に渤海文字の存在を指摘

する。

また、金在善以前にも稲葉岩吉(1935)にも指摘されているが、『江談抄』によれば、延喜年間(901-922、『日本紀略』などでは908年)に来朝した渤海国使の持参した牒状に、2人の姓名が書かれた文字が、未知の文字であったが、紀家(紀長谷雄)が「𠂔」を「木のつぶり丸」、「𠂔」を「石のまぶり丸」と呼んだところ、渤海の使節は応じたという。さらに『江談抄』はこの2文字を「異国作字也」とする。この字体そのものが渤海の出土文字資料の中に見られないことから、この記事の信頼性については、検討の余地があるが、渤海に独自の文字があったということについての『江談抄』の記事のソースが、『旧唐書』や『今古奇観』などとは、異なることは注目すべきだろう。

しかし、漢字ではない、周辺民族独自の文字の存在については、こうした断片的な文献の記述だけでなく、考古資料の裏付けが重要である。例えば断片的な記述ではあるが、考古学的には『吾妻鏡』に採録されていた文字が出土資料によって、漢字ではない女真文字であったことが判明した(顔1979)(図3・4)。文献史学、言語学、考古学などによる多角的な研究が、成果を上げた事例でもある。つまり、現在まで『江談抄』に採録されていた文字が、渤海の遺跡から出土した瓦押印文字に見られないこともあり、無論、『江談抄』の記事だけでは、渤海文字が存在したとは言えない。

1933-34年、東亜考古学会により渤海の東京城(上京竜泉府)の発掘調査が行われ、文字や記号が押印されたり、線刻されたりした、いわゆる瓦押印文字が出土し、その分析から渤海では広く漢字が用いられていたことが判明している(東亜考古学会1939)。その後、現在に至るまで渤海の遺跡からは、多くの瓦押印文字が出土しており、渤海で漢字が用いられていたことは、間違いない(李1982, 魏ほか2006)。渤海で、後世の契丹、西夏、女真のような漢字とは異なった文字体系が漢字を除外した形で行われていた可能性はほとんどないだろう。

ただ、東アジアの歴史を通観してみれば、独自の文字(突厥文字など)あるいは漢字から派生した文字によってのみ自国の言語を表記する場合ばかりではなく、ヴォヴィン論文が指摘するように、漢字の表音用法を借用あるいは併用する場合(郷札・万葉仮名)、漢字を改良した文字を併用する場合(チュノム・古壮字)などのケースもある。

出土した瓦押印文字の状況からだけでは、漢字が用いられていたことは言えるが、渤海で、漢文・漢語のみが用いられていたとまでは言えない。瓦押印文字の

多くはほとんど1・2文字からなり、漢字ではあっても、漢語に由来する単語とは即断できない。漢字を用いて渤海固有の言語を表記していた可能性(ヴォヴィン氏の言う第1のケース)がある。

万葉仮名の用法(漢字の音を利用して日本語を表記する方法)のみならず、「ひらがな」、「カタカナ」も用いられていた日本の平安時代でも、出土する墨書土器の多くは、漢字1・2文字であることが多いが、これらが、はたして漢語を表記しているのか、日本語を表記しているのかは、判断が難しい。我々は、紙ベースによる日本語の古典資料を知っているために、遺跡から出土した墨書土器の文字は、漢語をあらわしたものでだけでなく、日本語を漢字で表記したものも多く含まれていることを認識できる(平川2000)。

『東京城』(東亜考古学会1939)や三上次男(1990)によって指摘されるように日本の国分寺から出土する瓦押印文字のように瓦を供給している郡などの地名に関する文字が表記されており、その知名が渤海の固有語に由来しているとすれば、あるいは渤海の言語の音を漢字で表記しているのかもしれない。

また、注目すべきは、瓦押印文字の多くは漢字であると認定されているが、実際の報告書ではどのように判読してよいか分からない文字が多い。しかも、漢字と認めにくい文字をどのように解釈するのは、簡単に割り切れない問題を含む。こうした文字は、もともと漢字派生文字である女真文字には漢字の減画文字などから派生したものを多く含んでおり(金啓琮1984、山路1958)、渤海文字も当然、漢字の減画文字や異体字から派生したものが多く含まれることが想定される。全体的な体系として把握できない段階では漢字の異体字なのか、独自の文字なのかを峻別することは困難である。

5 まとめにかえて—ヴォヴィン論文の意義—

(1) 渤海の文字文化

古くは、渤海特有の略字や異体字の存在(日本語の国字のようなもの)を示唆する説(金毓黻1931、稲葉1935、p.72)もあったが、渤海の言語や文字に関する多くの研究では、渤海では文字体系としては、漢字による音写の存在は認めるが、漢字のみが用いられたとする説が多い(劉2004、馬2011、葉2012)。確かに瓦押印文字資料などの考古資料を見る限り、魏国忠らが指摘するように、日本独特の漢字(国字)に相当するものや、仮名や朝鮮の吏読のようなものがあったとしても極めて限定的なものであったのかもしれない(魏ほか2006、pp.450-457、王・魏2008)。

(2) 女真文字の起源

ここで、ヴォヴィン論文の妥当性について、筆者もヴォヴィン論文と同様の手法、渤海の文字資料と女真文字を比較し、検証してみる。

図2-4は、李強(1984)や『西古城』の報告書(吉林省文物考古研究所ほか2007)では、「羌」の異体字とされるものである。女真文字の中にも、似た字体として、「𐰺」(*tu)がある。この字は類例が多い。

図2-5は、李強(1984)や『西古城』の報告書(吉林省文物考古研究所ほか2007)では、「述」とされるものである。女真文字の中にも、似た字体として「𐰽」(*cia)「𐰾」(*tuŋ)などがある。

日本で発生した漢字(いわゆる「国字」)のような存在は否定できない。

(3) 渤海と女真の文化的な関係の再認識と総合的研究の必要性

女真文化が渤海文化の多くの影響を受けてきたことを踏まえれば、文字文化においても、両者を対比して研究すべきである。

確かに、女真文字の成立にあたって、漢字や契丹文字に倣っていることを示唆する資料、女真文字が漢字や契丹文字の影響を受けてきたとする研究は少なくない(毛1931、山路1958、金啓琮1984)。

金に投降した契丹(遼)人が、女真文字成立に関わったことをうかがわせる(山路1958)。前述したように『金史』の「完顔希尹伝」によれば、女真文字(大字)は、契丹字の制度にならったとある。また、『金史』に関して言えば、以下の資料をあげることができる。

『金史』卷125 文藝上

金初未有文字。世祖以來，漸立條教。太祖既興，得遼舊人用之，使介往復，其言已文。

『金史』卷66(完顔)勗伝

女直初無文字，及破遼，獲契丹、漢人，始通契丹、漢字，於是諸子皆學之。宗雄能以兩月盡通契丹大小字，而完顔希尹乃依仿契丹字制女直字。

金建国以前の漢字や契丹文字からは、単に字形の問題だけでなく、制字法や体系を含め、影響を受けていることは間違いないだろう(ヴォロビヨフ1983 pp.51-54, 148-159)。

ヴォヴィン論文の指摘以外にも、金在善(1996)は、『金史』本紀の冒頭に、「(渤海)有文字」を特筆していることは、単に漢字が使われていた以上の意味があると推測できる。

『金志』「又曰女直、肅慎氏遺種、渤海之別種也。」や『金史』卷2本紀太祖「女直、渤海本同一家」は、

とくに後者は政治的なスローガンの色彩も強いかもしれないが、女真における渤海の影響を示している。この関係は、金の建国にあたって、渤海人が多く登用されているだけでなく、建国後しばらく後も、金の第四代皇帝海陵王完顔亮の生母大氏は渤海人であることに見られるように、金に渤海の影響が少なからずあったことは容易に推察される。

しかし、漢字や契丹文字起源の女真文字もあるとされつつ(山路1958、金啓琮編1984)も、共通の字形は少なく、単純に漢字や契丹文字から女真文字を作ったと言えるような状況ではない。

渤海の出土文字資料において、漢字の範疇としてとらえにくい文字の評価は今後も慎重にすすめる必要がある。

無論、筆者も、現段階では「渤海文字」が存在したとは言えないと考える。しかし、女真文字が漢字から派生した文字体系だとすれば、渤海がその試行錯誤の時期に相当してはいないだろうか。渤海の文字文化に関して言えば、資料が限られている中で、単純に、渤海独自の異体字の類例や渤海文字の存否を探索するだけにとどまらず、日本の万葉仮名のような漢字を用いた表音システムの存在の可能性の検討、女真文字の起源の解明、さらには渤海と女真の文化的な関係については、ヴォヴィン論文のような通時代的な広い視野で研究をすすめていく必要があると筆者は考える。

ヴォヴィン論文は、渤海が存在していた時代の資料のみならず、女真などの後代の資料を活用することによって、今まで糸口が少なかった渤海の言語や歴史研究していく新たな可能性や必要性を明らかにしたと言える。

謝辞

本稿はアレキサンダー・ヴォヴィン先生の研究(Vovin, Alexander 2012. 'Did Wanyan Xiyin invent the Jurchen script?' Recent Advances In Tungusic Linguistics. pp.49-58, Wiesbaden: Harrassowitz.)の紹介と筆者の考えを述べたものである。ヴォヴィン先生とは、2007年の「古代東アジア交流の総合的研究」(国際日本文化研究センター：代表者王維坤)で共同研究者としてご一緒した縁でお知り合いになることができた。ちょうどそのころ筆者らは、ミハイル・ヴォロビヨフ先生の研究を勉強しており、ヴォロビヨフ先生の警咳に接したこともあるというヴォヴィン先生から直接親しくご指導いただいた。その段階ですでに先生は、渤海の瓦に押印してある文字資料の中に、女真文字に似ているものが存在することに気づいておられ、筆者

らにご教示くださっただけでなく、さらに論文として発表されたあともいち早く論文をお送りいただいた。ヴォヴィン先生の学恩には深く感謝申し上げます。

また、ヴォヴィン先生との出会いのきっかけを作っていたいただいた王維坤先生、また日頃より女真研究でご指導いただいている王禹浪先生、渤海文字の存在の可能性についてご教示をいただいたユーハ・ヤンフネン先生には、文末ながらとくに謝意を表する。

【註記】

- 1) 『今古奇観』は『警世通言』から引用したもの。
- 2) 邦訳は、朱榮憲1979(在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳)『渤海文化』雄山閣があるが、図版が少し異なる。
- 3) 図2の文字の*(アステリクス)は、(ヴォヴィン2012)による推定音。
- 4) 主に『東京城 渤海国上京竜泉府址の発掘調査』(東亜考古学会1939)および『間島省の古蹟』(満洲国國務院文教部編1976)などから引用しているとされるが、個別の出土遺跡や地点は不明である(李1984)。
- 5) 1976年にソ連沿海州のシャイギン遺跡で発見された女真文字銀牌と吾妻鏡に記載された銀筒の文字がほぼ同一であったことから、後者が女真文字であったことが確認された。なお、『吾妻鏡』では異国船乗員が所持していた銀筒に刻まれた文字は四文字とされているが、後述するシャイギン遺跡出土銀牌の分析から、1文字目とされたものは、文字ではなく花押であったことが判明した(清瀬1997、イブリエフ2006)。
- 6) 『康熙字典』に類例がある。
- 7) 以下の女真文字の推定音価は、金光平(金啓琮編1984)による。
- 8) 『金史』卷一本紀「後爲渤海，稱王，傳十餘世。有文字、禮樂、官府、制度。有五京、十五府、六十二州。」

【参考引用文献】

稲葉岩吉 1935『増訂満洲発達史』日本評論社, p.584
 イブリエフ, A.L. 2006(川崎輝美・川崎保訳)『日本の文献史料から見たシャイギンのパイザ』『古代学研究』175号 pp.21-26
 王 禹浪・魏 国忠 2008『黒龍江流域渤海国の歴史遺迹與遺物』『渤海史新考』哈爾濱出版社 pp.322-378(中文)
 顧 華 1979『女真国信牌の発現』『社会科学戦線』1979-2期 p.209(中文)
 魏 国忠・朱 国忱・郝 慶雲 2006『渤海国史』中国社会科学出版社 p.622(中文)
 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文化局・延辺朝鮮族自治州博物館・和龍市博物館 2007『西古城-2000~2005

年度渤海国中京顕徳府故址田野考古報告』文物出版社 p.381(中文)
 清瀬 義三郎則府 1991『契丹女真新資料の言語学的寄与』『日本語学とアルタイ語学』明治書院 pp.359-377(英文)
 清瀬 義三郎則府 1997『女真文字』『しにか』大修館書店 pp.35-40
 金 毓麒 1931『渤海国志長編』卷20(中文)
 金 啓琮編 1984『女真文辞典』文物出版社, p.410(中文)
 金 在善 1996『浅談渤海国的語言文字』『中央民族大学学报』1996-6期 pp.90-94(中文)
 金 在善 1997『李太白與渤海文字』『成都大学学报』1997年1期 pp.38-40(中文)
 黑板 勝美編 1933『国史大系第33卷 吾妻鏡』吉川弘文館
 シャフクノフ, E.V. 1958『渤海文字に関する問題について』『ソビエト東洋研究』1958-6号 pp.82-84(露文)
 シャフクノフ, E.V. 1977『シャイギン調査団の成果』『1976年の考古学的発見』pp.253-254(露文)
 朱 榮憲 1971『渤海文化』社会科学出版社, 平壤(朝鮮文)
 須田 勉・河野 一也編 2000『瓦押印文字と考古学』国士館大学実行委員会 p.209
 東亜考古学会 1939『東京城 渤海国上京竜泉府址の発掘調査』pp.44-47
 馬 洪 2011『渤海瓦印“仏”字的構形来源』『北方文物』2011-2期 pp.56-59(中文)
 平川 南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館 p.519
 満洲国國務院文教部 1976『間島省の古蹟 満洲国古蹟古物調査報告書(三)』国書刊行会(復刻版、初版は1942)
 三上 次男 1990『渤海の押字瓦とその歴史的格』『高句麗と渤海』吉川弘文館 pp.201-216
 毛 汶 1931『女真文字之起源』『史学年報』1卷3期, 燕京大学歴史学会 pp.171-175(中文)
 森 浩一 1994『日本の文字文化を銅鏡にさぐる』『考古学と古代日本』中央公論社 pp.683-750
 ヤンフネン, ユーハ 1994『中世中国北部における漢字からの派生文字の形成について』『フィン・ウゴル語学会ジャーナル』85号 pp.107-124(英文)
 山路広明 1958『女真文字の製字に関する研究』アジヤ・アフリカ言語研究室 p.461
 葉 麗萍 2012『唐代渤海の瓦押印文字與文字』『黒龍江史志』2012-9期 pp.46-47(中文)
 李 強 1982『論渤海文字』『学習與探索』1982年5期, pp.113-123(中文)
 李 強 1984『渤海“瓦押印文字”摹誤訂正』『黒龍江文物叢刊』1984年3期 pp.26-30(中文)
 劉 曉東 2004『渤海国語言初探』『北方文物』2004-4期 pp.57-63(中文)

ヴォロビヨフ, M.V. 1983『女真と金国の文化』ナウカ p.345
(露文)

ヴォヴィン, アレキサンダー 2012「完顔希顔は女真文字を
創造したのか?」『ツングース系言語における近年の進歩』
ハラソビツ出版社 ヴィースバーデン pp.49-57 (英文)

【図の出典】

図1 (ヴォヴィン2002)、原典はいずれも (朱榮憲1971)

図2 『女真文辞典』(金啓祿1984) 及び女真文字フォントは、
Jason Glavy's Asian Font Pageを利用して作成。

<http://www.reocities.com/jglavy/asian.html>

図3・5・6 『東京城』(東亜考古学会1939)

図4 『西古城』(吉林省文物考古研究所ほか2007)

図7 (シャフクノフ1977)

図8 『吾妻鏡』(黑板編1933) p.16